

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより  
恵深主 爾高  
くだり、みっかのほうむりをうけて、  
降三日葬受  
われらをくるしみよりときたまえり、  
我等苦 釋給  
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう  
我生命復活主 光  
えいはなんぢにきす。  
榮 爾 歸す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
いつもよよに、アミン。  
何時 世 世  
しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
使徒 等 同 座 者 忠  
じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい  
實 神 智 なるハリスト スの 役 者、 聖  
なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
神 撰 笛、 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
満器我國光

しよおしゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
照者亞使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給

司祭) ( 黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い しん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくの  
 主 爾 等 神 誓 作 して つく の 償

えよ、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくの  
 主 爾 等 神 誓 作 して つく の 償



誦經) <sup>しゅなんぢら</sup> 主 <sup>かみ</sup> 爾 等の神に



【 使徒經 (アポストロス) 182 半端 コリント後書 6 章 16~7 章 1 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒 <sup>じん たつ</sup> パヴェルが <sup>こうしょ よみ</sup> コリント人に達する後書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>なんぢら</sup> 爾 等は <sup>い</sup> 活ける <sup>かみ</sup> 神の殿なり、<sup>かみ</sup> 神の <sup>かつ</sup> 嘗て <sup>い</sup> 言いしが <sup>ごと</sup> 如し、<sup>いわ</sup> 曰く、<sup>われかれら</sup> 我 彼等 <sup>うち</sup> の中に <sup>お</sup> 居り、

<sup>かれら</sup> 彼等 <sup>うち</sup> の中 <sup>ゆ</sup> に行かん、<sup>われかれら</sup> 我 彼等 <sup>かみ</sup> の神 <sup>かれらわれ</sup> となり、<sup>たみ</sup> 彼等 <sup>しゅまたいわ</sup> 我の <sup>ゆえ</sup> 民 <sup>なんぢら</sup> とならん。主 <sup>かれ</sup> 又 <sup>なんぢら</sup> 曰く、故 <sup>なんぢら</sup> に 爾 等は <sup>かれ</sup> 彼

<sup>ら</sup> 等 <sup>うち</sup> の中 <sup>い</sup> より <sup>みづか</sup> 出でて、<sup>はな</sup> 自 <sup>けがれ</sup> ら <sup>ふ</sup> 離れよ、<sup>なか</sup> 汚穢 <sup>しか</sup> に <sup>われなんぢら</sup> 觸る <sup>い</sup> る勿 <sup>われなんぢら</sup> れ、<sup>ちち</sup> 然 <sup>なんぢら</sup> らば <sup>なんぢら</sup> 我 爾 等を <sup>なんぢら</sup> 納れん、<sup>なんぢら</sup> 我 爾 等の <sup>なんぢら</sup> 父

<sup>なんぢらわれ</sup> となり、<sup>しちよ</sup> 爾 等 <sup>しゅぜんのうしやこれ</sup> 我の <sup>い</sup> 子女 <sup>こ</sup> とならん、主 <sup>ゆえ</sup> 全 <sup>しあい</sup> 能 <sup>もの</sup> 者 <sup>われらすで</sup> 之 <sup>か</sup> を <sup>なんぢら</sup> 言 <sup>なんぢら</sup> う。是 <sup>なんぢら</sup> の <sup>なんぢら</sup> 故 <sup>なんぢら</sup> に <sup>なんぢら</sup> 至 <sup>なんぢら</sup> 愛 <sup>なんぢら</sup> の <sup>なんぢら</sup> 者 <sup>なんぢら</sup> よ、<sup>なんぢら</sup> 我 <sup>なんぢら</sup> 等 <sup>なんぢら</sup> 既 <sup>なんぢら</sup> に <sup>なんぢら</sup> 此 <sup>なんぢら</sup> く

<sup>ごと</sup> の <sup>きよやく</sup> 如 <sup>え</sup> き <sup>おのれ</sup> 許 <sup>およそ</sup> 約 <sup>にく</sup> を <sup>しん</sup> 得 <sup>けがれ</sup> た <sup>いさぎよ</sup> れば、<sup>かみ</sup> 己 <sup>おそ</sup> を <sup>もつ</sup> 凡 <sup>せい</sup> の <sup>せい</sup> 肉 <sup>せい</sup> と <sup>せい</sup> 神 <sup>せい</sup> との <sup>せい</sup> 汚 <sup>せい</sup> より <sup>せい</sup> 潔 <sup>せい</sup> く <sup>せい</sup> し、<sup>せい</sup> 神 <sup>せい</sup> を <sup>せい</sup> 畏 <sup>せい</sup> る <sup>せい</sup> を <sup>せい</sup> 以 <sup>せい</sup> て <sup>せい</sup> 聖 <sup>せい</sup> を

<sup>な</sup> 成 <sup>せい</sup> す <sup>せい</sup> べ <sup>せい</sup> し。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか。

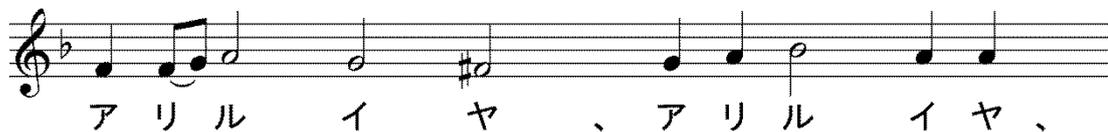
\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>へいあん</sup> に <sup>へいあん</sup> 平 <sup>へいあん</sup> 安、

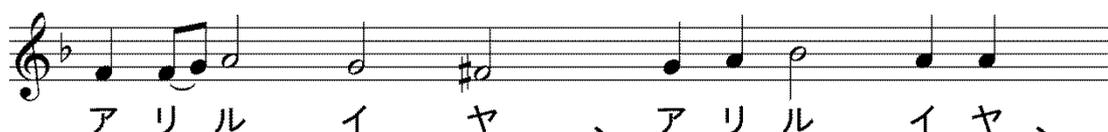
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第8調 】

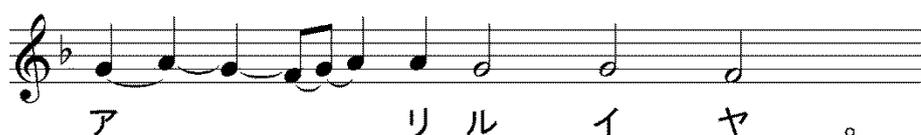
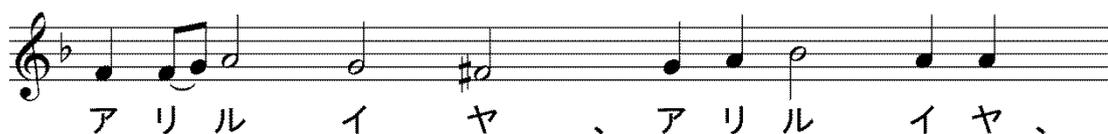
司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、



誦經) <sup>きた しゅ うた かみわ すくい かため よ</sup> 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



誦經) <sup>さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ</sup> 讃揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 26 端 6 章 31~36 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主曰えり、人の爾等に行わんを欲する事は、爾等も是くの如く

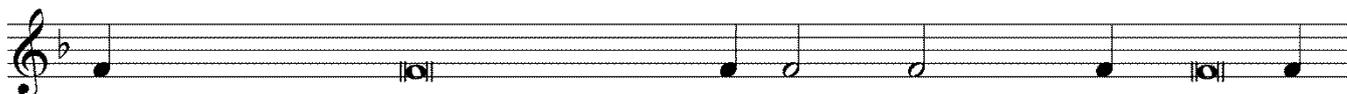
これ ひと おこな なんぢらも なんぢら あい もの あい なんぢら なん かんしゃ  
之を人に行え。爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何の感謝かあらん、  
けだしぎいにんら かれら あい もの あい も なんぢら ぜん おこな もの ぜん おこな なんぢ  
蓋 罪人等も彼等を愛する者を愛す。若し爾等に善を行う者に善を行わば、爾  
等に何の感謝かあらん、蓋 罪人等も是くの如き事を行う。若し返さるる望ある者に  
か なんぢら なん かんしゃ けだしぎいにんら すう ごと かせ ため ぎいにんら か  
借さば、爾等に何の感謝かあらん、蓋 罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借す  
なり。然れども 爾等敵を愛し、何を望まずして善を行い、又借し與えよ、則 爾  
ら むくい おお なんぢらしじょうしゃ こ な けだしかれ おん そむ ものおよ あ もの  
等の賞は多からん、爾等至上者の子と爲らん、蓋 彼は恩に負く者及び悪しき者に  
じあい ほどこ ゆえ なんぢらじれん なんぢら ちち じれん ごと  
慈愛を施す。故に 爾等慈憐なること、 爾等の父の慈憐なるが如くなれ。

\*\*\*\*\*

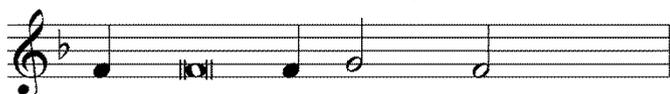
(比較用 口語訳) 人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、それくらいの事はしている。また返してもらおうつもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがた

はいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。  
あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。  
爾 歸